

## 郷に病みて：短歌

著者	佐々木，春瞳
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 3
ページ	7 8 - 8 0
発行年	1917-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6705">http://hdl.handle.net/2298/6705</a>

### 3 母を懷ふ歌〔舊春作〕

さらぬだに夕さいへばもの悲しきを天さかりゆく暮春の雲をふりさ

け仰ぎてはるかなるわが垂乳根の母を懷ひ悲寥の涙断つべからず

たそがれぬ夕餉終りぬ灯のもとに集ひて母らいましかたらむ  
われひとり團欒たのしき春の夜をあらぬと思へばさらに悲しも  
母ひとり老いゆくものか春の夜をしみじみ思ふ子は若きかも  
久方のおほ日のもとにわが母の日に日に老ゆと思へば悲しも  
ほろほろと櫻は散りぬそこひろひ唇にあつれば涙わくらし  
眠つぶればあな寂しくもほほるめりしばしな消ねそ母の笑顔よ  
しづかにも夕かたまけて花ぞ散る花散る宵は母のこひしも

### 郷に病みて

#### 囚人の歌

一一丙 佐々木春 瞳

餘念なく歎うち振れる囚人に監守の顔に夕陽が赤し  
夕されば段々畑ゆ歸り行く囚人の顔のものうげなれや  
夕陽さす監獄裏の畑なかに櫨の紅葉の静かなりけり

對岸の雜木林に沈みゆく夕陽見つめてもだす凶人  
聳に立つ獄屋の壁にあか／＼と落日照れば湧ける涙か  
ユーカーリ樹獄屋の空に聳につゝさゆらぎもせで更けゆく霜夜

### 小春日

小春日の眞晝しづかにもゝいろの山茶花咲けりふるさとの家  
しづこゝろ小春の椽の陽だまりに爪とり居れば枇杷の花散る  
呆けたる祖母は小春の陽だまりにひねもす蠅を打ちて暮すも  
小春日の蜜柑畑にさく／＼と鋏の音の快きかな  
ほの／＼と煙のぼれり小春日の眞晝しゝまの硝子工場に

### 筑紫野に

大河の土手の小草の桑かげにしづかに眼とづ小春日の午後  
のろ／＼と鞭に追はれて小春日の水に入り行く樺色の牛  
小春日の水の面漂ふ水草を追ひ行く牛にあかき午後の陽  
ひたすらに病む身いたはり小春日の野邊にしあれば牛鳴きつるゝ

### 晩秋

夕されば見知らぬ小鳥すがれ行く紅葉のかげに鳴けば悲しも  
黄昏の庭をすがれのもぢ葉のさゆらぎもせねばひた淋しかり

## 病める兒の歌

くさみだに風邪ひきしかと母上ののたまふもゆめ厭ふべからず  
躰温のやゝ高き日は子心にあざむく罪を母などがめそ  
夜のくだちとく眠らねば朝寢して母悲しめんとく眠らねば  
われゆゑにわが病むゆゑに目を選ぶ母の心を笑ふべからず  
宰相の印綬を帯びし空想ひまことになさむ願なりしかな  
見舞にともらひし鶏のおづ／＼と餌をあさる見ゆ冬ざれの庭  
母校にて發火演習すると云ふ冬晴の日に思ふそのかみ  
従軍記者黃の腕章の思ひ出もよろしや病みて家にこもれば

## 黎明

英法二年一 雅

男

男五人涙に月を眺むてふ今宵弱者の悲しみを言ふ  
喜びは消えて迹無き思ひ出の夢におびゆる我が心かな  
うつらうつらまごろむ夢に長唄のさけて今宵の雪積るなり  
あはかたの消へても絶えず流れ行く水に悲しき物語あり  
かたかたにへりし足駄の齒を見やり一人淋しくほゝゑみて見ぬ